

多賀



No.65

令和3年3月1日発行



四月から九月の祭事暦

四月

- 神武天皇祭遙拝 四月 三日(土)
- 御使殿大御供式 四月 十一日(日)
- 馬頭人大御供式 四月 十八日(日)
- 宵宮祭 四月二十一日(水)

●古例大祭

四月二十二日(木)

- 後宴祭 四月二十三日(金)
- 昭和祭 四月二十九日(木)

五月

- 喜寿薙寿祭 五月 十二日(水)
- 米寿薙寿祭 五月 三十日(日)

六月

- 御田植祭 六月 六日(日)
- 崇敬会大祭 六月二十六・二十七日(土・日)
- 六月古例祭 六月 三十日(水)
- 夏越大祓式 六月 三十日(水)

七月

- 金婚薙寿祭 七月 三日(土)

八月

- 万灯祭 八月三・四・五日(火・水・木)

九月

- 九月古例祭 九月 九日(木)
- 傘寿薙寿祭 九月二十一日(火)
- 秋季皇霊祭遙拝 九月二十三日(木)
- 池坊献華式 九月二十七日(月)
- 講社大祭 九月二十八日(火)

諸祭

- 御日供祭 毎日午前七時より
- おついたち参り 元日を除く毎月一日の午前七時より
- 月次祭 元日を除く毎月一日・十五日

※新型コロナウイルス感染症の状況により、変更が生じる場合があります。



ご挨拶

宮司 片岡 秀和



先ずは、ご皇室の弥栄と国家の安泰、併せて氏子及崇敬者の
ご平安を祈念申し上げます。

昨年、世界に蔓延した新型コロナウイルスは、春風百花繚乱
の季節を迎えたが、未だ終息せず、巷間ではなお厳しい状況に
ある。

新年の初詣にも降雪に併せ疫病が影響し、参拝者は例年を大
きく下回ったことは申すまでもないが、境内に於いて罹患者が
発生しなかった事は有難い事であった。

勿論、政府や県発表の防疫や神社本庁の指導もあり、出来得
る限りの対策は講じた。加えてご参拝される皆様が防疫に対し、
マスクの装着や消毒に心掛けられた事が功を奏した事だと思
う。更に寒極まった冬場は、インフルエンザウイルスも脅威の一
つであったが、コロナ対策で、密を避け手洗いやうがい等に配
慮された事で罹患者は例年の六分の一の事。常々の防疫の重
要さを実感した次第である。

恐らく、今年はワクチンが供給され、罹患者も大幅に縮小す
るものと思われるが、楽観しすぎであらうか。

ウイルス禍で、昨年は祭祀が満足に行なう事ができず、縮
小や中止を余儀なくされ苦慮された神社も多く見受けられた。

当社に於いても、最重儀である「古例大祭」は本殿祭のみ
執り行い、神輿の出御を中止し供奉者の参加をご遠慮願
い、神職のみが御旅所で祭事を行うなど、未だかつてない苦肉の
奉仕であった。夏祭りや秋のご例祭も同様に対応せざるを得
ず、ご祭神や氏子の皆様には大変申し訳なく、痛恨の極みで
ある。

今年は、ウイルスの状況にもよるが、多少変通したとして
も、本旨に基づき、祭祀を執行し地域の平安と活性に勤めた
いと思う。祭りは神社と氏子を繋ぎ、地域を一つにする重要
な伝統であり文化でもある。先人が護り伝えてきた悠久の歴
史ある大切な祭祀の灯を護り、次代に繋がるよう勤める所存
である。

氏子崇敬者の皆様には尚一層のご理解とご協力をお願い申
し上げます。

古例大祭

絢爛、四十数頭の騎馬行列



古例大祭諸儀

- 四月
- 四月 四日 御使殿御湯式・御使殿御注連張式並御神入式
 - 十一日 御使殿御湯式・御使殿大御供式・御使殿胡宮参向
 - 十二日 馬頭人御注連張式並御神入式
 - 十八日 馬頭人大御供式
 - 二十一日 御使殿御湯式・宵宮祭・胡宮神社神輿参社式
 - 二十二日 古例大祭
 - 二十三日 後宴祭
 - 二十五日 御使殿御神上式並御注連上式
 - 二十六日 馬頭人御神上式並御注連上式

四月二十二日は、当社の最重儀、「古例大祭」が斎行されます。

絢爛な騎馬供奉四十数頭の神幸行列は春の多賀町内を華麗に彩り、鎌倉時代から連綿と受け継がれた古式ゆかしい神事が終日繰り広げられます。

馬頭人・御使殿は次の方々です。



馬頭人 ^{きむら}木村 ^{たいぞう}泰造氏

昭和25年1月21日生（71歳）

- ・住所 彦根市後三条町
- ・現職 木村水産株式会社 代表取締役会長



御使殿 ^{そが}曾我 ^{たくみ}巧氏

平成14年7月16日生（18歳）

- ・住所 犬上郡多賀町土田
- ・会社員（今春より）

敬称略・令和3年3月1日現在

祈年祭（豊年講春季大祭）

三月十七日、本年の豊作を祈る祈年祭を齎行いたします。

県内約二万五千人の豊年講員を代表して長浜市西黒田地区大世話係の武田了久様に祈年使をご奉仕いただきます。

豊年講春季大祭祈年使を奉仕するにあたり



祈年使 武田了久

本年、豊年講員様の代表として祈年使の大役を仰せつかり、誠に身に余る名誉な事と感謝申し上げます。また当地区にとりましてこの大祭をご奉仕させて頂けることに大きな喜びを感じております。

懐古すれば父の代より豊年講員としてご奉仕させて頂いたとき平成二十八年には地区の御先輩より大世話係の大任を引き継ぎ、今日に至っております。

お陰さまで大病を患うことなく、会社を定年してから農業に取り組み現在は約三百アールの田圃を孫も含め家族一同和気あいあいと農業を営んでおります。

専ら農業中心の生活ではありますが、日頃は地域の皆様のご協力をいただきながら地域社会の奉仕活動にも携わらせていただいております。

これからもお多賀さんとのご縁と地域の皆様とのご縁を大切に日々生活を送っていく所存であります。

金咲稲荷神社鳥居奉納

金咲稲荷神社をご崇敬されている方より鳥居の奉納がございました。

去る令和二年十一月に奉納奉告式が執り行われました。此処にご篤志に感謝申し上げます、ご紹介させていただきます。

多賀町 株式会社ニシザキ 代表取締役 西崎 匠 様
羽島市 某 氏



お多賀さんとの縁 （御翠簾奉製）

大阪府富田林市

杉多製簾株式会社 杉多 公一

万葉集に「君待つと 我が恋ひ居れば我が宿のすだれ 動かし 秋の風吹く」という額田王の歌があり、七世紀頃には貴族の生活や宮中・神社仏閣で御翠簾が使われていたことが分かります。

弊社の創業年は不明ですが天保十年に近くのお寺に御翠簾を寄贈した事が残されています。

お多賀さんとのご縁は古く祖父の代より御翠簾を納めさせて頂いております。弊社があります富田林市は金剛山の麓の良質の真竹に恵まれた土地であり、その環境の中で一枚一枚真心を込めて奉製しております。その工程は①真竹の切断②表皮の削り取り③竹割り④ひご作り⑤艶出し⑥染め上げ⑦編み上げ⑧縁付け⑨仕上げと多くの過程を経て御翠簾が出来上がります。

現代では外国産資材の使用や機械化が進む中ではありますが、弊社では国産の資材と代々継承されてきた技法に誇りを持ち今回のお多賀さんへの御翠簾の奉製に執りかからせて頂きました。

今後もお多賀さんとのご縁と伝統文化を大切に後世に製簾の技を伝えて行きたいと思っております。



節分祭

福は内!
鬼は外!

二月二日、恒例の節分祭が斎行されました。
福豆まき・福餅まきは、めでたく還暦を迎えた八十五名の年男・年女が
ご奉仕されました。

奉仕者ご芳名（順不同・敬称略）

◆愛荘町

北村 秀則

赤尾 栄司

橋本 茂

宮村 直

田中 寿信

◆栗東市

山崎 重伸

笠原 仁之

桐畑 清隆

田中 圭子

武村 文勝

◆近江八幡市

大西 久嗣

金森 英之

柳田 悟

◆東近江市

杉原 祥浩

◆竜王町

川橋 庄栄

北村 讓治

下司 一文

寺嶋 嘉孝

◆日野町

三崎 喜昭

松井 信夫

高山 甚悟

高宮 高一

寺嶋 正子

野田 昌生

◆京都市

桑原 和彦

中川 幸之

杉江 伸之

中野 和之

野田三恵子

三宅 稔子

山根 勲

平綱徳太郎

中川 友彦

大西 藤夫

奥井ひとみ

◆甲賀市

西田 道弘

辻 幸彦

中川 圭司

三輪 真澄

堀 一郎

◆多賀町

山本 豪一

安野 重幸

木村 明美

藤野 由真

竹村 俊樹

小財 豊

奈良田 肇

屏風 浩純

◆彦根市

◆米原市

◆長浜市

押谷喜代弘

中田 護

大塚 衛一

井上 奨

木村 浩樹

奥長 清行

鳥塚 智

堤 保範

大西 和弥

長野 繁樹

高津 章人

中北 忠之

宮部 行人

山口順一郎

金子 義彦

川崎 博

◆御礼

福豆奉納

鬼の舞奉納

神崎 治

因原神楽団

多賀の祭り

支えた人びと

「中絶」の村の復活

「多賀大社御神事頭人御使殿名前記」(『多賀大社叢書 記録篇四』所収、以下「名前記」)は、慶長元年(一五九六)から元治元年(一八六四)まで、じつに二七〇年間の長きにわたって書き継がれた貴重な記録である。ここには多賀大社の四月・六月・九月の祭りで差定された頭人の名前をはじめ、世の中の大事件や差定にともなう何らかの問題点といった大小のできごとが、備忘録ふうに書き留められている。そのなかに一見すると不思議なメモがある。

その一つ、安永三年(一七七四)に正楽寺村(現、犬上郡甲良町正楽寺)の人物が四月の馬頭人に差定された際の記事は、つぎのようにある。「右正楽寺村ハ久敷中絶致在之候処、此度往古之通指定申候事。」つまり正楽寺村は、大昔は差定されていたが、その後「中絶」(中断)していた。それをこの安永三年に「復活」させたという。また翌年の安永四年、平野村が九月の頭人を出した際にも「中絶之処此度指定、無恙相勤候事」とある。

こうした記事は表1のとおり散見する。いずれも「しばらく差定を受けていなかった村を復活させた」として「今後は差定の対象に含めることにした」と

第4回

琵琶湖博物館 主任学芸員
渡部 圭一(わたなべ けいいち)
昭和五十五年愛媛県生まれ。
筑波大学大学院人文社会科学研究所、
早稲田大学人間科学学術院助手等を
経て現職。

表1 「名前記」における「中絶」に関する記事(1700年代)

年	月	村名	「中絶」に関する記事
安永3年(1774)	4月	正楽寺村	右正楽寺村ハ久敷中絶致在之候処、此度往古之通指定申候事
安永4年(1775)	9月	平野村	中絶之処此度指定無恙相勤候事
安永5年(1776)	9月	堀村	中絶之処此度指定無恙相勤候事
天明2年(1782)	4月	法養寺村	中絶之処此度指定無恙相勤候事
天明3年(1783)	9月	戸賀村	中絶之処此度指定無恙相勤候事
天明6年(1786)	4月	安倉西村	中絶之処此度指定無恙相勤候事
天明8年(1788)	4月	甲良尼子村	右甲良尼子村ハ久敷中絶之処、此度作平指定候処無恙相勤申候事
寛政2年(1790)	9月	山之脇村	右山之脇村ハ久敷中絶致在之候処、此度善右衛門指定候処無滞相勤候事
寛政6年(1794)	4月	清水村	右清水村ハ久敷中絶之処、此度彌兵衛二指定候処無恙相勤候事
寛政7年(1795)	4月	三ツ屋村	右三ツ屋村ハ久敷致中絶在之処増右衛門差定無滞相勤候事
寛政9年(1797)	9月	長寺村	右長寺村ハ久敷中絶之処、九年九月二源左衛門江差定候処無恙相勤候事

「多賀大社御神事頭人御使殿名前記」(『多賀大社叢書 記録篇四』所収)により作成。

町と村のバランス

それまで差定を受けていなかった村を新しく参加させていく。この状況を理解するには、そもそも江戸時代に多賀大社の頭人がどのようなルールで選ばれていたのかを押さえておく必要がある。一六五一年から一八五〇年の二百年間について、五十年刻みで、頭人がどの地区に差定されているかを地域別にまとめると図1のようになる。紺色で示したのは彦根の城下の町々、赤系の色で示したのは周辺の農村部の村々である。そしてこの比率は、江戸時代を通じてみごとに一定している。

この種明かしをすると、「馬頭人は近世になると郡内を二区にわけ、彦根町々を四区にわけて、郷番二年、三年目に町、次にまた郷番二年、という風に輪番を定め」ていたという証言がある(桜井勝之進「多賀大社春祭の頭人」『多賀大社叢書 論説篇』六〇一ページ)。いずれの五十年間をとっても、三割ほどが城下の「町」、あとは周辺の「村」になっているのはこのためである。言い換えると、町方と村方は、つねに一・二の割合で、規則的に馬頭人を出す仕組みになっていたのである。

ベテランの村と「初心者」の村

右で述べたことからすると、江戸時代の馬頭人は、町や村のどちらか一方の負担が大きくなりすぎないようにバランスをとっていたといえる。これを踏まえて、農村部の事情をもうすこし詳しくみてみよう。厳密にいうと、旧多賀郡の「村」は、計百二十四か村ある。このうち「名前記」によれば、江戸時代に四月の馬頭人を出した経験がある村はじつに五十六か村にのぼる。興味深いのは、この五十六か村が必ずしも均等に頭人を担当したわけではないことである。

ランキング形式で示してみると、江戸時代に馬頭人を輩出した回数は、一位が高宮村で、じつに二十九回。二位は十三回の北落村、三位は十一回出した敏満寺村と続く。馬頭人経験者の日記を書き残した敏満寺村の山本喜右衛門もその一人だ。こうした村は、江戸時代を通してコンスタントに名前がみえており、地域の旧家やこれを支える人々にも一定の習熟がみられたことだろう。ここでは仮に、「ベテランの村」とよんでおく。

これに対して、差定される頻度が少ない村もある。

経験回数が少ないという意味で、ここでは「初心者」の村」とよんでおこう。江戸時代の二百年間を通して、一度しか経験しなかった村は二十一か村にのぼる。おなじように二度しか経験しなかった村は十三か村、三度経験した村は八か村を数える。二百年間で一〜二回といえば、よほど運のいい人でなければ、一生のうちに自分の村の人があたる場面を目撃することはできなかっただろう。

この「ベテランの村」と「初心者」の村の比重は、江戸時代を通してだんだん変わっていくことに注目したい。図1では、農村部を三通り（二百年間で六回以上勤めた「ベテランの村」、一回ないし二回の「初心者」の村」、およびその中間の三〜五回の村）に区別して示した。これを見ると、古い時代には「ベテランの村」がかなりの頻度で担当しているのに対して、徐々に「初心者」の村」が担当する回数が増えていることがわかる。

新規参加の村の比率があがっていく傾向は、一七〇〇年代の後半ころから、「中絶」していた村を新しく参加させる対応がとられはじめたことに最大の理由がある。しばらく受けていなかった村を「復活」させていく、つまりは実質的に新メンバーの村々を加えていくことで、よりたくさんの村で祭りを維持しようとしたのである。ここには特定の村に集中することを避ける意図があったと受け止めてよいであろう。

おわりに

もともと中世の日本では、各地の有力寺社で頭人を差定する仕組みがみられた。ところが多くの祭り

では差定される頭人の負担の重さに抗しかねて、差定が中止され、または仕組みを変えていく。江戸時代の多賀大社でも似た問題が起きなかったわけではないが、それは全国の名だたる祭りが直面したのと同じ難問であった。そして多賀の祭りでは、何らかの抵抗にあった年でも説得に説得を重ね、差定を貫徹させてきた。

このような多賀の祭りの強靱ともいえる持続力は、これを支える仕組みを柔軟に作り変えてきたことに関わっていたと考えられる。ここまで述べてきたように、農村部に限れば、江戸時代に多賀大社の差定の範囲は徐々に広がりをみせていた。もともと「町と村の平等な負担の仕組み」があったところに加えて、新しい村を巻きこんでいく動きを得たことで、祭りの支持基盤をより確かなものにしていったといえる。

さきに紹介したとおり、江戸時代、頭人が差定に難色を示したとなると、神職や村役人、ときには藩の役人までが説得に駆けつけてくる。そこでは当然、説得の「材料」が必要になっただろう。折から村々の範囲を広げ、新メンバーを迎えてみんな祭りを維持しているという事実は、彼らの説得を支えるよりどころになったに違いない。そのシーンにはやはり想像の域を出ないが、いずれにしても「名前記」によるかぎり、江戸時代の多賀大社が差定を撤回した年は一度も確認できないのである。

※琵琶湖博物館渡部圭一先生には、社報62号から今号まで4回にわたりご寄稿を賜わり厚く感謝申し上げます。先生の益々のご活躍を祈念申し上げます。

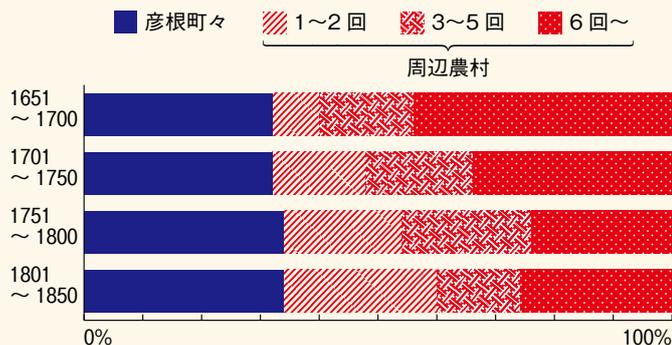


図1 江戸時代の馬頭人の被差定地域の割合
〔近江国多賀大社御神事馬頭人芳名録〕〔多賀大社叢書 記録篇四〕により作成。

崇敬会

50周年

特集

崇敬会五十周年を祝して

多賀大社宮司
崇敬会会長 片岡 秀和

多賀大社の二柱のご祭神は、お互いに誘い合い夫婦の契りを結び、オノコロ島（淡路島）を始め十四の嶋、いわゆる大八島（日本の国）を生み、次にオオヤビコノ神・オオワタツミノ神を始め三十五柱もの多くの神々を御生みになった。と古事記は伝えていて、「二霊群品祖」と言われる所以であります。

二霊とは伊邪那岐命・伊邪那美命の事で、群品とは生きとし生ける全ての生命であり、祖とは親という意味であります。つまり多賀大社にお祀りされる夫婦の神々は、あらゆる生命の根源を授けて下さった神様として、その御霊徳を仰ぎ報恩感謝の誠を捧げ、天に恥じない生涯を全うすることこそが多賀の神様への報謝の証である。という信仰が古より生まれ、「命の神様」「薙命長寿」の神様として今なお朝野の尊崇を集めています。

去る、昭和四十六年、命のご霊徳を敬仰し結成された崇敬会は、この度五十年という節目を迎えました。偏にご神慮とは申しながらも、ご神徳を仰ぎ心を寄せ合う多くの皆様により、育てられ護られてきた組織であります。

夫々、自分が生まれた事に、そして生まれた月日に感謝し越し方を振り返りつつ、今後の人生を歩むことは、洵に意義深い事です。

神様のご加護を受け、生かされている事に感謝申し上げ乍ら、これからも多賀大神のご神恩を一層戴かれ、お健やかでありますようお願い申し上げます。多賀大社崇敬会創設五十周年を迎えるにあたり、衷心より御礼を申し上げます、更なる会員拡大と次の周年に向け、皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。

崇敬会五十年の歩み

前身

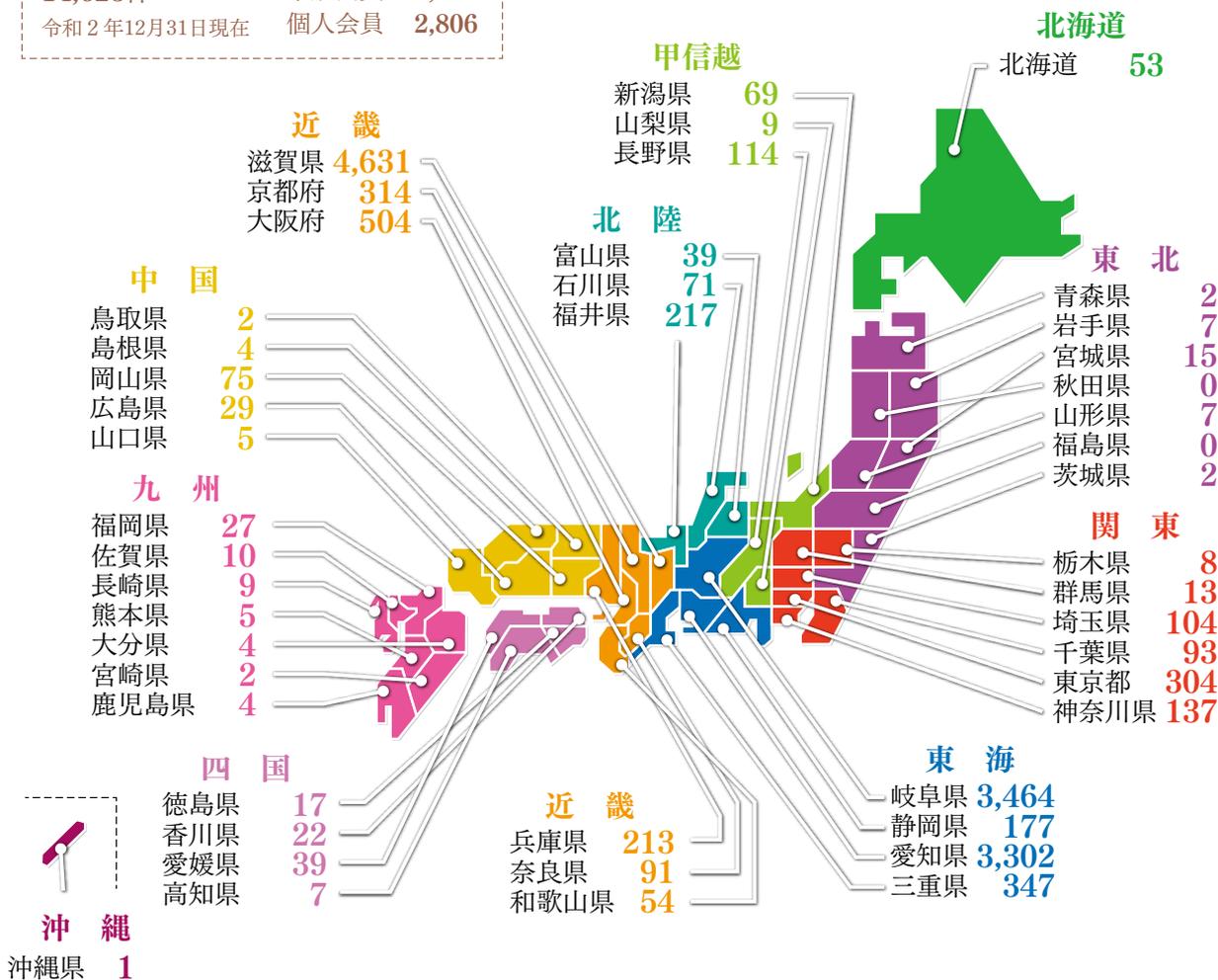
- 昭和21年 滋賀県湖南地方の崇敬者を中心に「報恩献膳会」として始まる
- 昭和33年 名称を「誕生会」に改める
- 昭和37年 金婚 銀婚 薙寿祭始まる
- 昭和46年 会勢拡大に伴い誕生会を基盤に「多賀大社崇敬会」を創設
- 昭和47年 会報第1号発行
- 昭和54年 支部第1号結成 滋賀県守山市杉江支部
- 昭和55年 オフィスコンピュータ（トスバックシステム15）を導入し管理業務を充実させる
- 昭和57年 第1回神恩感謝祭斎行
- 昭和60年 オフィスコンピュータグレードアップ（トスバックシステム65）
- 昭和63年 薙寿屠蘇を会員へ贈呈
- 平成4年 卒寿会員へ宮司揮毫色紙贈呈
- 平成5年 オフィスコンピュータグレードアップ（トスバックQ-E600）
- 平成9年 創設20周年記念大祭
- 平成13年 オフィスコンピュータグレードアップ（トスバックTP90/41）
- 平成19年 オフィスコンピュータからWindowsへOS変更
- 平成21年 御供物を長寿箸から薙命茶に変更
- 平成23年 創設30周年記念大祭
- 平成25年 神恩感謝祭を崇敬会会員大会に名称変更
- 平成27年 会費納入にコンビニ収納を追加
- 平成31年 創設40周年記念大祭
- 令和元年 第1回崇敬会会員旅行
- 令和2年 第2回崇敬会会員旅行
- 令和3年 第3回崇敬会会員旅行
- 令和3年 崇敬会会員大会を崇敬会大祭に名称変更
- 令和3年 大嘗祭当日祭並奉祝行事斎行
- 令和3年 新型コロナウイルス感染拡大防止の為 崇敬会大祭・各薙寿祭が中止となる
- 令和3年 創設50周年記念大祭

全国崇敬会会員分布表

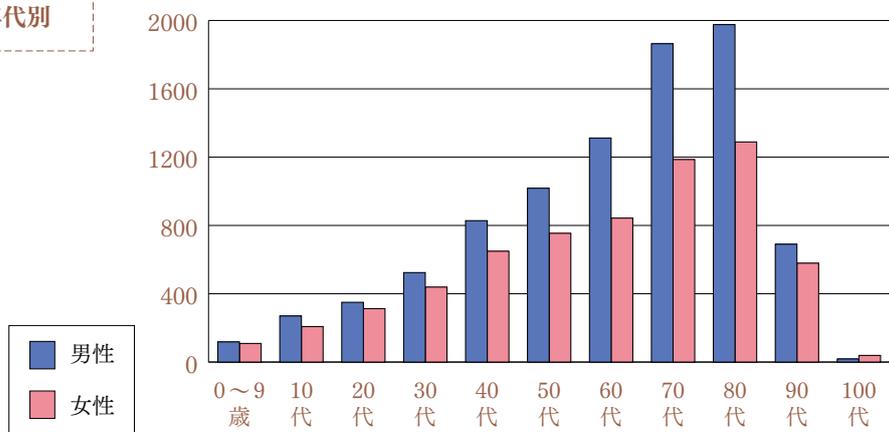
— 全国各地に会員様がおられます —

14,623件
令和2年12月31日現在

家族会員 11,817
個人会員 2,806



年代別



崇敬会
50周年
特集

崇敬会創設五十周年記念大祭

左記の日程にて記念大祭を齎行いたします。

今回は清興に上方落語桂米朝一門より、桂ざこばさんと桂米紫さんをお招きして落語をご披露頂きます。

笑う事は健康につながると言われています。当日はお多賀さんでより一層のご加護と落語の笑いをお受け下さい。

会員様には別紙にてご案内させて頂きま
す（要予約）、会員でない方は崇敬会にご
入会下さいましたらご案内を差し上げます。



【日程】

令和三年六月二十六日（土）

滋賀県・他府県

（愛知県・岐阜県を除く）の会員

六月二十七日（日）

愛知県・岐阜県の会員

正午 受付

午後一時 記念大祭

午後二時 記念式典

清興（落語）

※日程は両日共同じです。

令和3年筵寿祭のご案内



	年 齢	該当年	祭典日
古 稀	70歳	昭和27年生	10月13日（水）
喜 寿	77歳	昭和20年生	5月12日（水）
傘 寿	80歳	昭和17年生	9月21日（火）
米 寿	88歳	昭和9年生	5月30日（日）
金 婚	結婚50年	昭和47年に 結婚されたご夫婦	7月3日（土）

事前のご予約が必要です。お電話でお問い合わせ下さい。

多賀講総本部が新しくなりました！

前号でお知らせいたしました多賀講総本部の改修工事ですが、昨年末に完成し、お正月より新事務所として講務を開始いたしました。多賀講総本部は四年前に参集殿内に事務所を移し講務をすすめてまいりました。その間、旧多賀講総本部をバリアフリー化し、広々としたお部屋に改め、講員皆様が快適にご参拝



出来る様、改修工事を計画し進めてまいった次第です。お正月には多くの講員様のご参拝があり、以前よりは、明るい雰囲気になっていると一様に驚かれていました。どうぞ講員皆様のご参拝をお待ち申しあげております。



水墨画の奉納

此度の多賀講総本部改修工事竣工にあたり、水墨画家の濱中^{おちげん}彦氏(日本水墨画美術協会理事長)より水墨画「飯盛木之図」^{いもちぎののず}をご奉納いただきました。

飯盛木とは
奈良時代、元
正天皇の病氣
平癒の祈禱と
強飯を炊いて
シデの木で作
った杓子を添
え献上したと
ころ直ちに平
癒なされたと
伝えられ、そ
のシデの木の
末裔が現在の
飯盛木です。
その二本の
「飯盛木」と
鎮守の杜に棲
む「先食鳥」
が今回のモチ
ーフです。



夫婦の神様に誓う 日本の結婚式

緑あふれる神聖な多賀の社は、四季折々の風情がお二人をやさしく包みます。縁結びの大神様のお膝元で特別なひとときをお過ごし下さい。人生で最も輝かしい婚儀が素敵に思ひ出として、未永く心に刻まれますように...

ウェディングイベント開催予定

ウェディング見学会 **要予約**

●日時
令和3年5月9日(日)午前10時～午後5時

ウェディングフェア **要予約**

●日時
令和3年7月11日(日)午前10時～午後5時

※今後の社会情勢によって内容を変更または中止する場合があります。詳しくは参集殿HPまたはInstagramをご覧ください。皆様のご来場をお待ち申し上げます。

承り中
挙式・披露宴



当館は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を実施しております。

お申込み・お問合せは
多賀大社参集殿まで

参集殿直通

0749-48-1103

参集殿HP

多賀大社参集殿

検索



Instagram

#多賀大社参集殿



令和三年八月三日(火)～五日(木)

湖国の風物詩『万灯祭』

提灯は奉納者氏名を記して掲げられます
(会社・法人名でも承ります)
特別献灯料

(大) 二万円
(中) 一万円
(小) 七千円
普通献灯料

(大) 三千元
(小) 千五百円

春の宝物展『三十六歌仙絵』(県指定文化財)



期間 令和三年五月二日(日)～五日(水)
午前九時～午後四時
拝観料 お一人様 五〇〇円(庭園・宝物拝観)

永禄十二年に浅井長政の家臣、遠藤喜右衛門が当社へ奉納。

装いは衣文を強調し、着衣には繊細な文様を付し、描線はやわらかみに乏しいが、しっかりとした筆づかいがなされており、狩野派の名手による作品とされています。

今春は、その三十六歌仙絵を展示致します。春の麗らかな日を、古(いにしえ)の空間と共にお過ごし下さい。

編集後記

境内に僅かではありますが枝垂桜があります。お多賀さんで春を迎えると色づき、多くの参拝者を迎えてくれます。

長引くコロナ禍ではありますが、感染症拡大防止対策を徹底して皆様のご参拝をお待ちしております。

社報「多賀No.65」をお届けします。